

# 森林保全と山里の再生をめざして

## ～木質バイオマス資源の多様な利用を考える～

森林面積が国土の約7割を占める日本。しかし、輸入材などに押され林業従事者は減る一方、山は荒れ放題だ。そんな今、「木質バイオマス」の活用に熱い視線が集まっている。二酸化炭素を吸収し、地球温暖化を防止し、同時に林業を活性化するという画期的システムとは何なのか？ (作家・山下柚実)



↑間伐した木材を林内運搬車で山のふもとまで運ぶ。集積所で、木材つかみ機を使い降ろす様子(東京都青梅市)。写真提供=株森のエネルギー研究所

「木質バイオマス」とは、「植物に由来する有機物である資源」。今、エネルギー源として熱い視線が注がれている理由は明快だ。木質バイオマスを燃やすとCO<sub>2</sub>が出るが、樹木が成長する際にCO<sub>2</sub>を吸収するため、その収支はゼロ。これを「カーボンニュートラル」という。つまり、木質バイオマスを活用することで間伐材・残材が燃料となるために林業は活性化し、化石燃料の使用を抑制でき、資源は循環し、低炭素社会にも貢献できる——いくつものメリットが手に入るのだ。

2009年9月、「バイオマス活用推進基本法」が施行され、各自治体やNPO、産業界などで活用方法が模索されている。こうした流れを受け、昨年12月5日、「森林環境の保全と山里の再生をめざして」(主催)NPO法人農都共生全国協議

### 山村と都会つなげるネットワーク構築を

基調講演では、結城登美雄さん(民俗研究者・フリーライター)が、「地方は過疎化し第一次産業の担い手は激減している」と、ま

「森林環境の保全と山里の再生をめざして」(主催)NPO法人農都共生全国協議が宮城県の米作りから見えてきた」と、「鳴子の米作

会」と題し、木質バイオマス資源の多様な利用を考えたためのシンポジウムが都内で開催された。

### 林業の活性化と木質バイオマス・ビジネス

第2部のパネル討論は、甲斐良治さん(増刊現代農業)編集長)がコーディネーターを務めた。まず、

「今、林業も消費者と直接つながる仕組みを模索している。山の廃材から皿やカップなどの商品を作り、都市の人たちに使ってもらうことで山の暮らしを守りたい」と結城さんは熱く続けた。「林業が生き延びさえすれば、工芸品だけでなく木質バイオマス燃料の生産など、CO<sub>2</sub>削減の取り組みに着実につながっていく」。

「今、林業も消費者と直接つながる仕組みを模索している。山の廃材から皿やカップなどの商品を作り、都市の人たちに使ってもらうことで山の暮らしを守りたい」と結城さんは熱く続けた。「林業が生き延びさえすれば、工芸品だけでなく木質バイオマス燃料の生産など、CO<sub>2</sub>削減の取り組みに着実につながっていく」。

「今、林業も消費者と直接つながる仕組みを模索している。山の廃材から皿やカップなどの商品を作り、都市の人たちに使ってもらうことで山の暮らしを守りたい」と結城さんは熱く続けた。「林業が生き延びさえすれば、工芸品だけでなく木質バイオマス燃料の生産など、CO<sub>2</sub>削減の取り組みに着実につながっていく」。



↑木質ペレット燃料専用ストーブ。写真のようにオーブン機能を備えたものなど様々なタイプがある。写真提供=株森のエネルギー研究所

「森林組合が木を伐採するだけでなく、加工、販売を地域内で完結させる仕組みを作った。住宅の設計士がお客を山に連れてきて、要望を聞きながら木材を加工することも可能に。この『トータル林業』が好評で、年間130棟の建築実績となった」。さらに驚くことに、林業に従事するメンバーが130人以上も集まり、消防団の人手不足も解消。今後、木質バイオマスの活用という課題にも取り組みたいという。一つひとつの規模は小さくても地域

「森林組合が木を伐採するだけでなく、加工、販売を地域内で完結させる仕組みを作った。住宅の設計士がお客を山に連れてきて、要望を聞きながら木材を加工することも可能に。この『トータル林業』が好評で、年間130棟の建築実績となった」。さらに驚くことに、林業に従事するメンバーが130人以上も集まり、消防団の人手不足も解消。今後、木質バイオマスの活用という課題にも取り組みたいという。一つひとつの規模は小さくても地域

「森林組合が木を伐採するだけでなく、加工、販売を地域内で完結させる仕組みを作った。住宅の設計士がお客を山に連れてきて、要望を聞きながら木材を加工することも可能に。この『トータル林業』が好評で、年間130棟の建築実績となった」。さらに驚くことに、林業に従事するメンバーが130人以上も集まり、消防団の人手不足も解消。今後、木質バイオマスの活用という課題にも取り組みたいという。一つひとつの規模は小さくても地域

工場があり、ペレットストーブを使うことも可能。木に親しみ楽しさを知って」(大場さん)、「間伐材の蓄(はし)などがコンビ二等で出回っているのを使ってほしい(池淵さん)など、具体的な助言がなされた。都市に暮らす人でも、森を再生するネットワークに参画することは決して不可能ではないのだ。



→結城さんが紹介した、木材から作られたうつつや道具。